

自尊感情の複数回測定とその展望

——測定方法と研究目的に注目して——

箕浦有希久*・成田 健一**

抄録：本稿では、同一個人に対して複数回の自尊感情測定を実施するという手続き的な共通点をもつ諸研究を概観し、それぞれの研究目的の相違に言及しながら、研究上の問題点と課題を指摘した。自尊感情を複数回測定する必要がある場面の多くは、“特性”よりも“状態”的な自尊感情に注目しており、本稿でも状態自尊感情を中心的に取り扱った。これまでの研究が抱える問題への対処として、一日再構成法と呼ばれる新しい調査方法および新しい超短縮版尺度を利用することによって、先行研究の問題の一部を解決できる可能性について述べた。最後に、自尊感情の変化または安定性と、個人の適応や精神的健康との関係性について、測定方法と研究目的を越えて知見を統合させていく今後の展望を示した。

キーワード：state self-esteem, repeated measurement, day reconstruction method

はじめに

自尊感情は、心理学の多様な研究分野で、さまざまな立場から定義され研究されてきた。数多くの先行研究を通して、自尊感情という概念を総合的・包括的に定義すると、“自分の自己概念がどれくらい肯定的に知覚されているか、その特性や質の程度 (VandenBos, 2007)” や、“自己に対する主観的な評価のうち、自分自身を好ましい存在だと感じたり、有能であると思ったりする程度 (Zeigler-Hill, 2013)”，そして“自分自身を基本的に良い人間、価値ある存在だと感じていることである (遠藤, 2013)” とされる。

これまで行われてきた自尊感情研究の中には、自尊感情概念をとらえる視点として、“特性”と“状態”の区別を重要視する研究が多くある。特性自尊感情 (trait self-esteem) とは、時間や状況を通して比較的安定した、持続的な自尊感情を意味する。一方、状態自尊感情 (state self-esteem) とは、個人が一瞬一瞬に経験する出来事や状況によって、短時間のうちに急速に変化する自尊感情を意味する。

特性と状態の両視点から自尊感情概念を区別してとらえることには多くのメリットがある。特性自尊感情の高さは、全般的な精神的健康や成功・達成の経験に裏付けられた社会的適応といった、個人の心理的 well-being を幅広く反映した総合的指標として、多くの調査や研究場面で重宝される。特性自尊感情の低かった人が高い特性自尊感情をもつようになることは、おおむね好ましい変

化として受け止められる。人の全般的な適応に注目するときには、普段の自己を反映した特性自尊感情が有用であると言えるだろう。一方、状態自尊感情に注目すると、個人の瞬間的な自尊感情の高低をとらえることができる。また状態自尊感情を複数回測定することによって、個人内での上下変動や一定期間内の変化量について知ることができる。状態自尊感情に注目するということは、自尊感情の変動に注目しているということに他ならない。そして個人内の自尊感情の変動に注目するならば、測定するものが特性自尊感情であれ状態自尊感情であれ、同一個人に対する複数回の測定が必要不可欠であると言える。

本稿では、自尊感情の複数回測定を行う諸研究を概観し、測定の時間的な間隔の長さ、状態-特性自尊感情への注目という視点から、それぞれの研究の立ち位置を明らかにしてみたい。各研究の測定間隔や注目している点は必ずしも厳密に分けられるものではなく、当然例外もあり得るが、それぞれの研究方法が主眼としている点に絞り、Table 1 にまとめた。自尊感情の測定の間隔は、数分から数時間程度の“短期”と、約2週間以上の“中・長期”の2つに分けて考える。まず、短期の測定間隔で状態自尊感情に注目する研究は、日常生活や実験場面で経験する出来事によって敏感に変化する自尊感情の測定に研究の目的が焦点づけられている。一方、短期の測定間隔で特性自尊感情に注目する研究というのは想定しづらい。短期間に自尊感情を複数回測定するということは、自尊感情の変動に注目していることに他ならない

*関西学院大学大学院文学研究科研究科研究員

**関西学院大学文学部教授

Table 1 自尊感情の測定間隔と研究の目的ごとの状態－特性への注目の違い

測定間隔	研究の目的	測定方法	研究方法	注目している自尊感情の種類
短期	日常生活における変化の検討	経験抽出法, 日記法		状態
	実験的操作による変化の検討		実験法 (操作チェック・従属変数)	状態
中・長期	測定の安定性の検討	再検査法		特性
	特定サンプルにおける変化や安定の縦断的検討		パネル調査, コホート研究	特性
	介入の効果検討		介入研究	状態 (出来事への反応の仕方) に注目するとき 特性 (全般的な適応や健康) に注目するとき

ため、安定的な特性自尊感情は研究目的に合致しない概念であると言えよう。次に、中・長期の測定間隔で状態自尊感情に注目する研究としては、やや例外的ではあるものの、個人の出来事の実験に対する状態自尊感情の変化の仕方が適切な反応となるような介入を試みた際の効果の検討が想定できる。最後に、中・長期の測定間隔で特性自尊感情に注目する研究としては、心理尺度による特性自尊感情の測定が安定的に行われることを確認するための再検査法や、個人の適応や健康の増進・不適応や不健康の低減を目的とした介入の効果検討場面が考えられる。また、中でも比較的長い期間において、個人の適応や健康のあり方がどのように変化しているかに注目する、パネル調査やコホート研究もあるだろう。

自尊感情の複数回測定を行う諸研究

心理尺度を用いた調査方法は、比較的少ない労力と時間で簡便に実施可能である。そのため、同一個人を対象とした、一度の調査だけでなく、二度以上の複数回測定を行う研究が、これまで数多く存在している。同一の個人に対して時間間隔において自尊感情の測定を2回以上行った場合、個人内における自尊感情の変動（あるいは一貫性）や、一定期間を通じた自尊感情の平均的な高低を知ることができる。反対に、ある個人に対する自尊感情の測定を一度だけ行う研究の多くは、個人の特性的な自尊感情に注目している。自尊感情の複数回測定には、それぞれの研究の目的によってさまざまな測定回数・間隔・期間がある。

日常生活における変化の検討

測定方法 経験抽出法 (experience sampling method: ESM) と呼ばれる調査方法では、日常生活を送っている調査対象者に対し、数日間にわたって一日数回、定刻もしくは無作為な時刻における測定を実施する (尾崎・小林・後藤, 2015; Hektner, Schmidt, & Csikszentmihalyi, 2007)。調査対象者には質問紙冊子を持ち歩かせ、携帯電話や専用機器によってシグナルやリマインダを与

えることで回答のタイミングを指示する (Larson, & Csikszentmihalyi, 1983)。紙媒体の質問紙冊子を利用せず、メールや Web サイトによって回答を収集したり、専用の携帯型情報端末 (personal digital assistant: PDA) を貸借して回答させたりする場合もある (Fuller-Tyszkiewicz, McCabe, Skouteris, Richardson, Nihill, Watson, & Solomon, 2015)。調査対象者はシグナルが発せられるたび、毎回同じ内容の質問項目に回答を行う。経験抽出法の調査期間はおよそ1-2週間であり、睡眠時を除いてランダムに行われる測定ごとの間隔は1-3時間程度であることが多い。たとえば毎日、日中の間に8回の測定を1週間連続で行うとした場合、調査全体では総計56回の測定が実施されることとなる。

自尊感情の変動性 (instability of self-esteem) 研究と呼ばれる文脈では、約一週間にわたって毎晩、自尊感情を測定する (市村, 2012)。ふだんの生活の中で就寝の少し前に回答をおこなうことを日々反復することから“日記法 (diary method)”とも呼ばれるこの方法では、約24時間 (1日) 間隔で測定がくり返し行われる。調査期間は1週間程度であることが多く、調査全体では総計7回ほどの測定が実施されることとなる。

研究目的 経験抽出法による状態自尊感情測定は、日常生活の中で出来事を経験した瞬間から時間が経っていない状態での回答が得られる。そのため、過去の出来事を思い出して回答させるような方法では避けることができない、想起によるバイアスが生じにくいというメリットがある。また、個人内の状態自尊感情がどのように日内および日間で変化しているかについて、時間的解像度の高いデータが得られる。

1週間の日記法調査で得られた7つの自尊感情から算出することのできる個人内平均値は、単発測定で得られる特性自尊感情尺度の得点よりも、個人の自尊感情のベースラインとしての真の値をより正確に反映していることが期待できる (Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991)。なぜなら単発の測定で得られる特性自尊感情尺度の得点には、回答者の回答時の気分や直前までの出来事の実験

など、状態的な要因による誤差が含まれている可能性があるためである。また7つの自尊感情から算出することのできる個人内標準偏差、すなわち自尊感情の変動性の高さは、怒りと敵意の感じやすさ (Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989) や、抑うつ的な特徴 (Kernis et al., 1991) と関連することが明らかとなっている。

測定の安定性の検討

測定方法 心理尺度の再検査信頼性を確認するためには、同一人物を調査対象として数週間から3ヶ月程度の時間間隔において2回の調査を実施し、得られたデータ間の相関係数を算出することが多い (Hogan, 2007)。この方法は再検査法 (test-retest method) と呼ばれる。

研究目的 測定尺度の再検査信頼性 (test-retest reliability) に注目している。心理尺度の信頼性 (reliability) とは、測定結果の一貫性や安定性を意味しており、心理尺度を構成する質問項目間の“内的一貫性 (internal consistency)”を検討する方法、同一サンプルに対して行われた異なる測定時点間の結果の一致度を検討する“再検査信頼性”が代表的なその検討方法である。心理尺度の内的一貫性とは、ある心理尺度を構成する複数の項目間の内容や測定結果の共通性・類似性を指している。内的一貫性を検討する方法には、折半法 (split-half method) やクロンバックの α 係数がある。

実験的操作による変化の検討

測定方法 実験的操作の前後で2回、あるいは実験の途中も含めた前中後など3回以上、状態自尊感情の測定をくり返す。ひとつの実験の中で複数回の状態自尊感情測定を行う場合、測定の間隔は数分から数十分程度であることが多いと考えられる。そのため被験者は、非常に短い間隔で同一の状態自尊感情尺度への回答をくり返すことにならざるを得ない。

研究目的 このような研究は、実験的に操作された出来事や経験に関連して生じる、状態自尊感情の上昇や下降といった変化に注目している。状態自尊感情を上昇させる要因として、成功経験や理想的な自己の状態の達成、あるいは理想的な自己の基準を下方修正することが挙げられる (e.g., James, 1892/1920; Higgins, 1987)。一方、状態自尊感情を低下させる要因として、失敗経験や理想的な自己の状態を達成できないこと、現実的な状況と比べて理想的な自己の基準が高すぎるなどが挙げられる。また、対人的な受容や他者からの賞賛によって状態自尊感情が上昇し、社会的排斥の経験や他者からの拒否によって状態自尊感情が低下することも指摘されている (e.g., Leary, 1999; Leary & Baumeister, 2000)。

介入の効果検討

測定方法 心理療法や行動変容プログラムなど、心理的な治療や援助を目的とした介入的関わりにおいて、その前後や途中経過の中で自尊感情を複数回測定する。この場合の測定間隔は介入の内容によってさまざま、数週間や数ヶ月の場合もあれば数時間や数日のこともある。介入の目的として重要視されているのは多くの場合、個人の一時的な心理状態を変化させることではなく、むしろ特性的な心理状態や精神的健康を良好なものに変化させることである。したがって、介入の効果検討の指標としては特性自尊感情を測定することが多いと考えられる。

研究目的 特性自尊感情の高さは、対人的な受容や社会的な達成などと結びついており、総合的な個人の適応や精神的健康の指標の1つとみなされている (Guindon, 2010)。そのため非常に幅広い内容の介入的関わりについて、ポジティブな効果や影響の有無や程度を検討するために役立つと考えられる (e.g., 野村, 2009)。一方、後者のような数時間や数日といった比較的短時間で行われる介入的関わりにおいては、状態的な自尊感情を測定することが適切であるだろう。比較的安定した個人特性である特性自尊感情は、数時間や数日といった短い期間には変化しにくいものであり、介入によって生じた効果や変化が反映されにくいと考えられる。

特定サンプルにおける変化や安定の縦断的検討

測定方法 同一対象者に対して、数か月や数年といった十分に長い間隔において、複数回くり返しの測定を行うことがある。このような研究は多くの場合、自尊感情の発達の・経年的な変化を縦断的に検討することを目的としている。自尊感情の経年発達に注目している研究では、ほとんどの場合、状態的な自尊感情ではなく特性的な自尊感情を測定する。

研究目的 ここまでは基本的に“特性”よりも“状態”自尊感情の複数回測定を行う必要がある場面を紹介した。特性自尊感情はそもそも、安定していてそう簡単に変化することがない概念として考えられている。そのため、状態自尊感情を反映した指標として特性自尊感情の測定尺度を利用するといった場面を除き、わざわざ同一人物を対象に特性自尊感情をくり返し測定する機会は少ないと考えられる。例外がパネル調査やコホート研究と呼ばれる長期縦断的な調査である。数年から数十年といったスパンで生じる人の生涯発達に注目する場合、基本的には個人内で安定しているとみなされるパーソナリティ特性のような心理の変数であっても、長期間をかけて緩やかに変化することがありえる。そのような心理発達の変化をとらえる場合には、同一人物を対象として特性自尊感情をくり返し測定する機会が生じる。これらの

研究では複数回の測定の時間的間隔が十分に長く空いているため、自尊感情尺度へ回答した記憶が、測定結果に与える影響をほとんど危惧する必要がない。

自尊感情の複数回測定を行う研究の問題点

ここまで述べてきた、同一の対象者に複数回の自尊感情測定を実施する研究にはいずれも、その測定方法ゆえに生じる問題点を3点指摘したい。特に最初の2つは測定間隔が短期の場合により大きな問題となりやすい。

第一には、同一の心理尺度をくり返し使用することによって、飽きや疲労の生じる点が挙げられる。飽きや疲労が生じることによって、回答内容が不正確なものとなったり、信頼性・妥当性の低い結果となったりしてしまう危険性がある。これは第一の点とも関係しており、記憶の影響を考慮する必要がないほど十分に長く時間間隔のあいたくり返しの測定であれば、それと同時に回答に対する飽きや疲労の影響もほとんど不安視する必要はないはずである。回答への飽きや疲労が懸念されるのは、一定の調査期間中に回答の総数が多く求められるような場面である。たとえば、数日間にわたって日に何度もくり返し測定を行う経験抽出法調査や、約1週間毎晩くり返し測定を行う日記法調査が、この条件に該当している。そしてこの問題は、研究成果の一般化可能性の低下という問題にもつながっている。飽きや疲労が生じるほど、調査対象者に求める負担や労力の大きな研究は、最終的に得られる有効回答が、調査を最後まで完遂することができた一部の偏った人々のデータになってしまう恐れがある。たとえば、極端に生真面目で強迫傾向をもつ人や、他人や社会に貢献したいといった向社会性の強い人物の有効回答が多くなり、反対に、忙しい生活を送っている人や回答忘れをしやすい人、または長期間にわたる複数回の調査すべてに答えるために必要な体力や認知的資源をもたない人のデータは、調査への参加を拒否されたり、たとえ参加しても調査途中で脱落してしまったりするために、ほとんど得られなくなってしまうだろう。

第二には、前回の回答に関する記憶がその後の回答に及ぼす影響が挙げられる。記憶の影響とは、たとえば、前回の回答を基準としてその後の回答を特定の方向になるべく変化させようとしたり、反対に前回とその後の回答がよく一致するように回答してしまったりするような、回答者の作為が生じることが考えられる。特に、一日の中で数時間おきに何度も回答をくり返す経験抽出法調査や、実験操作の前後や途中といった数十分程度の時間間隔で複数回の測定を行う実験的操作のチェックといった研究は、直前の回答内容をつぶさに思い出せるほど測定の間隔が非常に短いと言える。そのため、自身が以前に行った回答内容の記憶がその後の回答に与える影

響が、その他の研究方法と比べてより大きくなってしまいう可能性がある。

また、心理尺度の再検査信頼性を検討しようとする研究目的で再検査法を採用する場合には、記憶の影響と測定したい心理的構成概念の真値の変化とのトレードオフが、抜き差しならない問題となる。調査対象者の記憶が2回目の回答結果に及ぼす影響を小さくするためには、1回目と2回目の測定の時間的間隔を、確実に忘却が生じるほど十分に長くとるしかない。しかし、ここでもう一つの問題が生じる。自尊感情は、目標の達成や失敗といった自己評価に直接関わるような経験や、他者から受容されたり拒絶されたりするといった社会的出来事を経験することによって、変化することが知られている。実験的に操作する方法や過去の重大な出来事を回想させる方法と違って、普段の日常生活の中で経験する出来事が自尊感情の変化に与える影響はおそらく大きなものではない(e.g., 箕浦・成田, 2016)。しかし、一つ一つは小さな出来事であっても、それらが累積すればするほど自尊感情の平均的な高低に及ぼされる影響は大きくなっていくだろう。また、日常生活の中とはいえ、自尊感情の高低を著しく変化させるような重大な出来事が生じる可能性も当然存在している。これらの点から、1回目と2回目の測定の時間的間隔が長くなればなるほど、その間、調査対象者にさまざまな出来事の経験や発達・成熟が生じ、測定内容の真値の変化が起きている可能性が高くなってしまふと考えられる。そうになると、再検査信頼性が低いという結果が得られた場合に、それが心理尺度の問題に由来しているのか、それとも尺度に道具としての問題点は何も無く、自尊感情の真値の変化によって生じている結果であるのか、判断することができない点が問題となる。

第三には、“再検査効果 (test-retest effect)”として先行研究によって指摘されてきた問題が挙げられる。同一人物に対して、同じ心理測定・心理検査を2回実施する再検査の場面において、1回目の測定結果よりも2回目の測定結果の方が、概してより適応的で社会的に望ましいとされる結果が報告されやすいことが見出されている(速水, 1976, 1977; Windle, 1954, 1955)。再検査効果と呼ばれるこの現象は、検査と再検査の質問項目が同一のものであるという記憶によって生じるものではなく、また測定間隔が長期すぎても短期すぎても生じないとされる(長谷川, 1997)。心理尺度の再検査信頼性を検討する研究は、第一の点において既述したトレードオフの問題点のために、多くの研究が2週間から3ヶ月程度の測定間隔を採用している(小塩, 2016; 高本・服部, 2015)。これは再検査効果の生じやすいとされる測定間隔と重複しており、再検査効果を考慮に入れずに再検査信頼性を利用することには危険性がともなう。さらに、

たとえば臨床研究で散見されるような、統制群を設けることなく、介入前後にそれぞれ行った同一の心理尺度の測定結果の変化を示すことで介入の効果検討をする研究においても、この再検査効果は大きな問題である。

自尊感情の複数回測定を行う研究の問題への対処

ここまで述べてきた問題点について、その一部でも解決できる可能性のある対処法を測定方法の観点から提案してみたい。第一の問題点としてあげた、飽きや疲労の影響については、経験抽出法の代わりとして一日再構成法があげられる。そして、第一・第二の両者への対処法として平行検査法があげられる。ただし平行検査法は大きな労力を要する。その労力を抑えるために短縮版尺度が役に立つ可能性についても述べておきたい。第三にあげた再検査効果は、記憶または飽きや疲労の影響とは無関係に生じている可能性がある。しかし、どのような要因によってこの再検査効果が生じているのかは、まだ明確とは言えない点も多い。人の自己概念やパーソナリティについて、長期的な視点から発達変化を縦断的に検討しようとするパネル調査やコホート研究においても、統制群を設ける必要性や、3回以上の複数回の測定が加算的に及ぼす効果への配慮が重要な点となるという指摘もあり(長谷川, 1995)、さらには統計的回帰効果の可能性も指摘できよう。そのため、再検査効果そのものへの対処となる測定方法を提案することは困難である。本稿では飽き、疲労、記憶の問題に関する測定法的な対処に焦点づけて論じたい。

一日再構成法 (day reconstruction method : DRM)

前述のように経験抽出法による調査は、自然な日々の生活における時間の経過にともなって、人々が経験しているさまざまな出来事ならびに心理状態が変化していく様子について、詳細なデータを得ることができる点がメリットとなる方法である。そして、経験抽出法と比べてより短い調査期間・より少ない測定回数で実施することができ、条件によっては、ほぼ同等のデータが得られる調査法として、一日再構成法がある(Diener & Tay, 2014; Kahneman, Krueger, Schkade, Schwarz, & Stone, 2004)。一日再構成法とは、昨日一日を通して経験したすべての出来事について、調査対象者が時系列に沿って順番に思い出しながら、その瞬間の情動や自己について質問紙へ回答させる方法である。

一日再構成法による調査は、単発測定の調査でまとまった回答を行うだけで済むため、調査期間・測定回数の点で経験抽出法や日記法調査と比較して調査対象者に求める負担の少ない方法である。このことから、一日再構成法によって前述の問題点の第二に示した飽きと疲労の

生起を小さくし、調査途中での脱落者がより少ない研究を行うことが可能であろう。ただし、一日再構成法では実際の出来事の実験から回答までの間におよそ1日の時間が経過しているため、想起による回答バイアスの影響がある。また昨日一日のことだけを尋ねる方法であるため、心的状態の日内変動を知ることができるが、経験抽出法や日記法調査でとらえることができるような日間変化について調べることはできない。

平行検査法 (parallel test method)

再検査法を用いる研究では、同一人物を調査対象として時間間隔をおいて2回の調査を実施し、得られたデータ間の相関係数を算出することが多い。このとき平均値や分散が同等で測定内容も等価であるようなもう一つの別尺度を作成して、検査と再検査でそれぞれ用いる方法を平行検査法と呼ぶ。同じ心理的構成概念を同等に測っているながら、見かけ上は質問項目の表現が異なっていることから、前述の問題点の第二に示した記憶がもたらす影響を無視できると考えられる。

ただし心理尺度で平行検査法を試みるということは、実質的には新たにもう一つの心理尺度を開発するという事に等しく、非常に大きな労力をともなう。実際のところ、平行検査フォームを備えて開発され、妥当性が十分に行われている心理尺度というものは決して多くはない。この現実的な問題を解決する糸口となる可能性を、超短縮版の状態自尊感情尺度に見出すことができるかもしれない。次節で詳述するが、超短縮版尺度は1項目や2項目といったきわめて少ない項目数から構成されている。そのため従来の心理尺度と比較して、平行検査フォームを開発しやすいと考えられる。第三、第四の平行検査フォームまで準備することも不可能ではないだろう。懸念される点としては、たとえば表面的な項目表現が不一致であっても、質的に同等な概念を測っているのであれば、そこにはやはり記憶の影響や再検査効果が生じる可能性も捨てきれない。

超短縮版尺度

近年、回答に要する時間や紙幅を節約でき、簡便に利用できるというメリットをもつ、超短縮版の特性自尊感情尺度を開発する研究が増えてきている(Bagley, 2005; 箕浦・成田, 2013; Robins, Hendin, & Trzesniewski, 2001)。そして、箕浦・成田(2016)は箕浦・成田(2013)の超短縮版の“特性”自尊感情尺度に基づき、先行研究(阿部・今野, 2007)の方法を参考にして、文頭文末を「いま、……感じる」と改変することで、超短縮版の“状態”自尊感情尺度の開発と妥当性の検討を行っている。超短縮版の状態自尊感情尺度は同一人物に対して繰り返しの測定を行ったとしても、

従来の項目数の多い心理尺度と比べて、容易に他のさまざまな内容の質問項目の中にまぎれ込ませることができ、記憶や印象に残りにくいだろう。そのため前述の問題点の第二に示した、記憶がもたらす影響を小さくすることが可能だと推測される。また同時に、超短縮版の状態自尊感情尺度は、回答に要する時間や認知的負荷が小さいため、前述の問題点の第一に示した飽きと疲労の生起を小さくすることにも貢献するはずである。

おわりに

自尊感情を複数回測定する研究はいずれも、同一個人内における自尊感情の経時的な変化あるいは安定性に注目している。そうでなければ自尊感情を複数回測定する意味はないとも言える。そして自尊感情の変化あるいは安定性のもつ意味は、研究目的によって多様である。

自尊感情を複数回測定したときの変化に注目することのメリットは、自尊感情の単純な高低だけでは説明できない、自尊感情と個人の適応や精神的健康との関連性を明らかにすることができるという点である。伝統的には自尊感情の単純な高低への注目が大きく、自尊感情の高い個人は精神的に健康であるとみなされてきた。そこへ自尊感情の変化やその大小の個人差に注目する研究が登場するようになった。たとえば、自尊感情が高くて不安定な個人には怒りや敵意を感じやすいといった不適応的特徴があると指摘されたり (Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989)、状態自尊感情が低下したときには自尊感情の高い個人ほど攻撃的に振舞う事実が明らかとなった (Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Twenge & Campbell, 2003)。これらは自尊感情の変化を不適応的な特徴としてとらえるものであるが、反対に、発達の視点や臨床的介入の効果検討といった研究目的においては、自尊感情の変化は必ずしも悪いこととは限らない。

自尊感情を複数回測定したときの安定性に注目する研究では、どのような安定性に注目しようとしているのか、その安定性の意味をよく吟味する必要があるだろう。たとえば、日常生活で生じるささいな出来事ぐらいで動じることのない泰然とした安定性をもつ自尊感情は、本来感 (authenticity) やセキュアな自尊感情とも呼ばれ、適応的で良い特徴ととらえられている。その一方で、何があっても一切変化することがなく、現実の経験から独立して凝り固まった安定性をもつ自尊感情は、もはや精神病理的で不適応的な特徴であると言えよう。さらには、ポジティブな状況では上昇し、ネガティブな状況では低下するといった、出来事の経験や周囲の状況に応じた一貫性のある変動をする自尊感情もありえるだろう。これは絶対的な基準から見れば不安定な自尊感情だとみなせるが、状況との関係や変化の仕方のパターンが安定的な自尊感情だとみなすこともできる。このよう

なタイプの自尊感情の安定性は、状態自尊感情に進化的、適応的な役割を想定する立場から見たときには、もっとも望ましく健全な自尊感情のあり方だと言えるのではないだろうか。

自尊感情を複数回測定するという共通点をもつ研究は数多く行われきたが、本稿のようにそれらを一つの視座からまとめてとらえる試みはこれまで少なかったように思われる。自尊感情を複数回測定するという共通点がありながらも、これまではそれぞれの研究目的の範囲内だけで独自に、自尊感情の変化または安定性を不適応的または適応的のみならず、個別に知見が累積されてきたと言える。今後は自尊感情の複数回測定に関する問題の解決方法を実証的に検討しながら、自尊感情の変化や安定性に注目する諸研究の知見を統合的に理解していく姿勢が重要となるであろう。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- Bagley, C. (2005). Robustness of two single-item self-esteem measures: Cross-validation with a measure of stigma in a sample of psychiatric patients. *Perceptual and Motor Skills*, 101, 335-338.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Diener, E. & Tay, L. (2014). Review of the Day Reconstruction Method (DRM). *Social Indicators Research*, 116, 255-267.
- 遠藤由美 (2013). 自尊感情 self-esteem 藤永保 (監修) 内田伸子・繁樹算男・杉山憲司 (編) 最新心理学事典 (pp.287-290) 平凡社
- Fuller-Tyszkiewicz, M., McCabe, M., Skouteris, H., Richardson, B., Nihill, K., Watson, B., & Solomon, D. (2015). Does body satisfaction influence self-esteem in adolescents' daily lives? An experience sampling study. *Journal of Adolescence*, 45, 11-19.
- Guindon, M. H. (2010). What is self-esteem? In M. H. Guindon (Ed.), *Self-esteem across the lifespan: Issues and interventions* (pp.3-24). New York, NY: Routledge.
- 長谷川博一 (1995). 自己評価の水準と項目評価性が再検査効果に及ぼす影響 心理学研究, 66, 141-145.
- 長谷川博一 (1997). 再検査効果と項目再認記憶の関係について 心理学研究, 68, 417-422.
- 速水敏彦 (1976). 質問紙性格検査の再検査効果 教

- 育心理学研究, 24, 57-61.
- 速水敏彦 (1977). 再検査効果についての一研究——児童用 YG 性格検査の場合——教育心理学研究, 25, 40-44.
- Hektner, J. M., Schmidt, J. A., & Csikszentmihalyi, M. (2007). *Experience sampling method: Measuring the quality of everyday life*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Hewitt, J. P. (2009). The social construction of self-esteem. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *The oxford handbook of positive psychology, 2nd ed.* (pp.217-224). New York, NY: Oxford University Press.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review, 94*, 319-340.
- Hogan, T. P. (2007). *Psychological testing: A practical introduction*. 2nd ed. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
(ホーガン, T. P. 繁榎算男・椎名久美子・石垣琢磨 (訳) (2010). 心理テスト——理論と実践の架け橋——培風館)
- 市村美帆 (2012). 自尊感情の変動制の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究, 20, 204-216.
- James, W. (1892/1920). *Psychology: briefer course*. New York, NY: Henry Holt and Company.
(ジェームズ, W. 今田 寛 (訳) (1992). 心理学 岩波書店)
- Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D. A., Schwarz, N., & Stone, A. A. (2004). A survey method for characterizing daily life experience: The day reconstruction method. *Science, 306*, 1776-1780.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 1013-1022.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology, 61*, 80-84.
- Larson, R., & Csikszentmihalyi, M. (1983). The experience sampling method. *New Directions for Methodology of Social and Behavioral Science, 15*, 41-56.
- Leary, M. R. (1999). The social and psychological importance of self-esteem. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology*. (pp.197-221). Washington, DC: American Psychological Association.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology, Vol.32*. (pp.1-62). Cambridge, MA: Academic Press.
- Lenton, A. P., Slabu, L., & Sedikides, C. (2016). State authenticity in everyday life. *European Journal of Personality, 30*, 64-82.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013). 2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 21, 37-45.
- 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定尺度の開発——妥当性に関する多側面からの検討——感情心理学研究, 23, 78-86.
- 野村信威 (2009). 地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討 心理学研究, 80, 42-47.
- 小塩真司 (2016). 心理尺度構成における再検査信頼性計数の評価——「心理学研究」に掲載された文献のメタ分析から——心理学評論, 59, 68-83.
- 尾崎由佳・小林麻衣・後藤崇志 (2015). スマートフォンを使用した経験サンプリング法: 手法紹介と実践報告 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 12, 21-29.
- Robins, R. W., Hendin, H. M., & Trzesniewski, K. H. (2001). Measuring global self-esteem: Construct validation of a single-item measure and the Rosenberg self-esteem scale. *Personality and Social Psychology Bulletin, 27*, 151-161.
- 田端拓哉・池上知子 (2011). 自我脅威状況における補償的自己高揚の検討 社会心理学研究, 27, 47-54.
- 高本真寛・服部 環 (2015). 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向 心理学評論, 58, 220-235.
- Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2003). "Isn't it fun to get the respect that we're going to deserve?" Narcissism, social rejection, and aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin, 29*, 261-272.
- VandenBos, G. R. (Ed.). (2007). *APA Dictionary of Psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
(ファンデンボス, G. R. 繁榎算男・四本裕子 (監訳) (2013). APA 心理学大辞典 培風館)

Windle, C. (1954). Test-retest effect on personality questionnaires. *Educational and Psychological Measurement, 14*, 617-633.

Windle, C. (1955). Further studies of test-retest effect on personality questionnaires. *Educational and Psycho-*

logical Measurement, 15, 246-253.

Zeigler-Hill, V. (2013). The importance of self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.), *Self-esteem* (pp.1-20). New York, NY : Psychology Press.